

利尻町立博物館

日 時：2002年6月8日午前10時～11時30分

場 所：利尻町立博物館

ヒアリング先：利尻町立博物館 佐藤雅彦氏

参加委員：鈴木健司、田中清治、佐和洋亮、上田直樹

報告者 上田 直樹

利尻町立博物館の佐藤雅彦さんにお話を伺った。佐藤さんは、静岡出身で利尻町に来て12年目とのことで、利尻町役場の教育委員会所属の学芸員という身分で、ハエがご専門とのことである。

北海道希少野生動植物の保護に関する条例（以下、単に「条例」という）においては12種が指定されているが、当該指定種は、利尻島には分布していないとのことであった。そこで、レッドデータブックにおいて絶滅危惧ないし準絶滅危惧種に挙げられている種のうち、利尻島に生育していると思われる（和名に「リシリ」の名称が付されている）種について、個別に生育状況を聞かせて頂いた。

「リシリゲンゲ」：マメ科。山頂付近に生息。生育場所の自然崩壊や、登山者増加に伴う登山道の拡大により本来の植生場所から谷の方に落ちてきている。

「リシリ lindou」：沓形コースと鴛泊コースとの合流点に大きな群落があったが、この地点の登山道（特に沓形コース）が荒れており、群落の崩壊の危険がある。

「リシリビャクシン」：ヒノキ科。沓形コースの中腹～下の方からも見られる。特に生育場所崩壊等の危険性はない。

「リシリオウギ」：マメ。山頂付近に生息。「リシリゲンゲ」と同様の問題がある。

「リシリソウ」：元々利尻島で発見されたことから「リシリソウ」の命名がなされているが、礼文や北海道の内陸部でも見られる。利尻島には極わずかな株しか残っておらず、佐藤さんの前任の植物研究者も、生育場所は守秘事項として伝承されたとのことである。利尻での生育場所は、人が容易に立入りのできず、又、利尻以外でも生育している植物（礼文島では普通に生育している）なので、盗掘の危険性はあまりないと思われる。高山地域に生息。

「リシリカニツリ」：イネ科。イネ科の植物は地味で一般的には盗掘等の対象にならない。

「リシリヒナゲシ」：ケシ科。リシリ島の固有種。利尻の固有種はリシリアザミ、ボタンキンバイと併せて3種。登山道付近に生育していたが、登山道拡大に伴い、生育場所が崩壊し、下の方に落ちてきている。ただ、地上付近でも種子から繁殖させることが比較的容易（むしろ大きく花が咲く可能

性が高い)なので、個体数としては確保されている。問題点としては、移入種のチシマヒナゲシ(白い花)が流入していること、又、地上で一旦生育したリシリヒナゲシを再び山頂付近で生育させようとする運動があるが、環境対応能力の点や、リシリヒナゲシのみの保護に偏重していること(リシリヒナゲシの写真を撮るため他の希少植物を踏みつけて山中へ入っていく等の端的な例がある)が挙げられる。町でもより多くの観光客にリシリヒナゲシを見てもらうよう地上で植えるキャンペーンが行われているが、本来の生育場所以外での繁殖には賛否両論がある。

「リシリトウウチソウ」:バラ科。登山道からよく見られるが、草地でも生育するので、特に上記の生育場所の崩壊の危険はない。

これらの植物につき、商業的な盗掘の情報は特に寄せられていないとのことであった。ただ、姫沼付近では、観光客が植物を持ち帰っている痕跡が少なからず認められるとのことである(いわゆる「おみやげ盗掘」)。

リシリヒナゲシ等はフェリーの待合場所やみやげ屋で種子が売られているが、これらは一応規制前に合法的に採取されたものを繁殖させたもののようである。利尻山に関する現行の規制としては、国立公園の特別保護区に指定されていることに伴うもの、営林署関連での遺伝種保護林(上部600メートル以上の登山道以外の地区への立入禁止)がある。

なお、リシリアザミは98年に低地で発見された新種で、チシマアザミが下を向いて咲くのに対し、リシリアザミは上を向いて咲く点に特徴がある。両者の雑種も生まれており、通常の進化の過程なのかは不明。海岸付近に植生するため、土木工事等により生育場所が奪われる危険性があるが、個体数自体は比較的多く保たれているとのことである。

ボタンキンバイは、大群落が鷺泊コースの山小屋付近にある。個体数の点では特に問題がないとのことである。

利尻町としては、野生動植物の保護又はその啓蒙を目的とした予算(ex.登山パトロール等)は特に組んでいないとのことである。町として特に保護対策を講じていることはないようである。敢えて言えば、後述する携帯トイレの供与や、フェリー内での啓蒙活動がこれに該当すると思われる。

むしろ、町としての関心の重点(予算の配分)は、ウミネコの増大による漁業被害や、生活被害にあり、その一環としてのウミネコの生態調査が行われている。現時点で明らかになった調査結果によれば、枝幸(エサシ)の生育地がキツネに荒らされた、天売(テウリ)島の生育地がノラ猫に荒らされた、といった原因に加え、利尻はウミネコの脅威となるべき肉食動物がおらず、巣立ちの割合も高く、又、漁港付近には餌となるべき魚も打ち上げられること、が近時利尻でウミネコ増大の要因となっている。ただ、種々の対策によ

り生育地は移動しているとのことである。

また、冬期に来るトドについても漁業被害の問題が生じている。トドは日本では繁殖が必ずしも適切に行われておらず、絶滅の恐れがある動物の1つではあるが、一方で、魚網ごと食い破ってしまい、漁師にとっては多大な財産的被害を及ぼす害獣となっている。町の予算も漁業被害の観点からは組まれてはいるが、トド保護の観点からの対策というものはとられていない。

近時、離島ブーム、百名山ブーム（利尻山は1つ目の山）もあって、島に訪れる観光客が増加傾向にある（平成13年度は全島で26万人）。登山を目的とする団体客が特に増加しているようである。問題は、6月～8月に観光客が集中することである。夏のピーク時には頂上は順番待ちの状況である。

利尻山には避難小屋にトイレがなく、現在最も深刻な問題になっているのがトイレの問題である。携帯式トイレの普及には町も予算を充てているものの、実態としては「垂れ流し」の状況が続いているようである。トイレの問題は、町民の飲用水の汚染や、植生の影響（肥料が供給されてしまう）など、現時点では具体的に判明していないが、将来的に深刻になる恐れのある問題を含んでいる。携帯トイレは現在無料で配布しているが、その具体的使用については登山者のマナーに委ねざるを得ず、例えば、携帯トイレを利用しても、その使用済みのゴミをそのまま山に捨てたり（場合によっては、登山道から遠く離れた場所に投げ捨てる）するのであれば、携帯トイレの効用は無に帰することになる。過去には、町で携帯トイレ専用のテントを設けたが、その場所でそのまま用を足してしまう人もおり、結局使用が中止されてしまうケースもあったようである。携帯トイレの普及を進めることが利尻山の環境保全にとって有効か否かは、現状では判断が難しい問題であるが、利尻山の場合は、登山口が2箇所しかなく、回収も比較的容易なので、マナーが改善されれば携帯トイレの効用が活かされる可能性は高いと考えられている。バイオトイレについては、予算の問題、自然環境への負荷がデータ上不明であること、登山客の増減の数値的把握がなされていないこと、から現時点では検討されてはいないが、「山のトイレを考える会」等の関係機関を横断する団体との会合の中で継続的な協議がなされている。登山客によって自然との触合いのイメージのレベルが異なるので、それぞれのレベルに応じたコースを設けることも提唱されてはいるが、利尻山で導入するのはまだ時期尚早といった印象であった。ガイドの対応によってもマナーのレベルが異なってくるものと思われる。

利尻町の自然全般について、昔の植生を示すデータがなく、温暖化や土木事業等によりどの程度の影響がもたらされているのかが不明である。ただ、佐藤さんの分かる範囲でも、土木事業による自然景観の崩壊（特に海辺の植生につき、護岸工事や芝の植付がなされている）湿地への笹やその他帰化植物の進入、は相当進行している印象があるとのことである。また、山火事や伐採で相当程度森林面積は失われているとのことである。一旦森林が

矢われ笹が入ってくると、深く根が張るので、再度森林が自然に復活するのは難しく、そのような形で笹が生えた原野が方々で見られた。明確な原因は不明だが、森林減少に伴う土砂の流入によるものと思われる「磯焼け」と呼ばれる現象（石灰が岩を覆い、昆布が生えなくなる）が生じたこともあった。4～5年前に開通された自転車道による植生に対する被害も憂慮されるところである。

ヒヤリングの後、博物館の裏手にある植物園（？）に案内していただいた。利尻島に生育する各種植物（高山植物に限らず）を生育している場所で、相当数の植物の名を教えて頂いたが、前提知識の乏しさがたたり、帰京してから程なく、殆どの植物の名称を利尻の思い出とともに忘れてしまっていた。が、その中でも、基本中の基本と言われる「トドマツ」「エゾマツ」の区別をマスターできたこと、「チシマザクラ」という桜が相当標高の高い場所（一般登山道からは見えない）に生育していることは印象深かった。

以 上